井上光晴

心臓

井上光晴

小屋

講談社

小屋
昭和四十七年五月二十日第一刷発行
著　者　井上光晴
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(03)九四五―一一一一(大代表)
振替東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　有限会社文信社
定価　六五〇円
0093-125895-2253 (0)　(文1)

© Mitsuharu Inoue 1972 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえします。

目次

小屋　5
小泊海岸の犯罪　121
雪　169
発表誌一覧　209

装幀＝田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

小屋

小屋

鉛色の潟に打ち上げられた鰯があまり多いので、しまいにそれを片足で飛び越す遊びを繰返すのが面倒になった。半月ばかり前、江迎昌夫がはじめてこの浜辺を通った時も、今よりも小さい死魚が一面に散らばっており、見慣れたものよりも胴体の短いずんぐりした海鳥の群れが、一羽二羽と舞い降りては、食べ飽きたような嘴を気まぐれに突っついていた。それから彼は海岸の土手に上がると、自転車を押す足の長い少年に、探す家の所在を尋ねたのだ。清潔なランニングシャツを着、紺色の半ズボンをはいた少年は自分についてこいというふうに顎をしゃくり、彼は後に従いながら、パンクでもしたのかときいた。しかし少年は答えず、あんたもやっぱり大学生か、ときき返した。

少年がそういったのは、中沢遼一と友達だと考えたからであろう。確かに彼はその男と

短い期間行をともにしたが、友達というわけでもなく、また学生でもなかった。思いもかけず、というより小さい村なので当り前のことかもしれないが、少年はすでに中沢遼一の自殺を知っていた。

彼は緑色のつるつるした綺麗な巻貝を拾うと、廃船の舳先に止まっている鴉に似た斑の鳥を目がけて投げた。だが名のしれぬ鳥は翼さえ動かそうとせず、彼が近づいても嫌らしい位横着な素振りを示した。彼は龍骨の見える船腹を掌で叩いて鴉に似た鳥を追い払い、しばらくそこに立ち止まって白い波頭に被われた海を眺めた。風の気配さえないのに、なぜ海は波立つのか。沖合いにひろがる雲の裂目からわずかに落陽が差し込み、遠く水平線の右手に連なる島々を包んで淡い陽炎のようなものが立ちのぼっている。七月。汗ばみさえしないのは、彼の体質のせいであった。

海辺の村に到着した日の夕ぐれ、かつて迷彩を施されていたとかろうじて判明する古い倉庫の近くで、江迎昌夫はまたしても足の長い少年と出会った。もしかすると彼を待ち受けていたのかもしれなかったのだ。さして驚いた顔もせず、昼間とは別人のような口ぶりで、少年は立てつづけに質問を発した。何処からきたのか。中沢家をわざわざ訪ねてきた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

のはむろん自殺した遼一の伝言を持ってきたのだろうが、何か遺言みたいなものが残されていたのか。死んだ遼一とはどんな知合いか。中沢家の離れには何時まで滞在するのか。

駐在巡査にでもいい含められたように、少年の言葉はまるっきり可愛気がなかった。

「あの家に厄介になるってこと、よくわかるな」

「そりゃそうさ」足の長い少年はこともなげにいった。

「この村じゃ何でもすぐ知れ渡ってしまう。……みんな舌にも目を持っとるからね」

舌にも目というのは大方大人の受け売りなのだろう。彼はその思いを口にした。

「舌にも目か、なるほど。それじゃこの村の人間は誰でも三つ目小僧というわけか」

「おじさんのサンダルは変っとるね」

「おじさんはあんまりだぜ」

「名前を知らんからね」

「えむかいまさお」

「江迎っていうのか。お寺みたいな名前やね」

「お寺さまか、なるほど。うまいこというんだな」

少年は笑いかけたが途中で頬を硬張らせた。倉庫の陰に人影があらわれたのだ。その男は丈の長い竹竿の銛を二本肩に担いでおり、彼の会釈を無視して擦違いに通り過ぎた。

「中沢さんの家には一体誰と誰が住んでいるんだい。広い家だからどんな人が何処にいるのかさっぱりわからん」

しばらくして彼はいちばん知りたいことをきいたが、少年はあらぬ方を向いて答えなかった。その時、またしても先程と同じように二本の銛を担いだ男の姿が近づき、彼はのけぞるようにして身をかわした。

少年が足早に去った後、彼は岩場に立って短い口笛を吹いた。そこから村の明りをひとつも見ることはできなかったが、そっちがその気なら、こっちもその気になるだけさ、と思いながら。

二日目も三日目も浜辺にでるたびに銛を持った男たちに遠巻きにされるような状態がつづき、四日目の朝には猟銃を手にした男から一昨年の夏起きたという未解決の事件について、押しつけられるような話をきいた。ある朝、薬を売る行商人の死体が、鰯ともども、潟にまみれていたというのだ。

そして五日目の午後、それまでおぼろげながらえがいていた中沢家に住む人々の輪郭が一挙に鮮明になったのである。数年前まで石炭の積出しを兼ねた貨客兼用の私鉄が走っていたというレールのない線路を目的もなく歩いている時、行き違いに走ってきた自転車の女に声をかけられたのだ。

「あなたね、遼一のバッグを届けてくれたっていう人。そうでしょう」

彼は怪訝な面持で相手を見返した。中沢家ではもう幾度も会っているはずの遼一の姉に、初対面のような扱いを受けたからである。

「町に行っとるんね。荷物を持ってないようだからまだ帰るところじゃないでしょう」

「あんたは……」

「そんなにびっくりした顔をせんでもいいんよ。うちらは双子の姉妹。自分でも感心する位、よく似とるんだから」

「そうですか」

「町に行くのなら、自転車貸してあげましょうか」

「町に行ってるわけじゃないんだ」

「そう、そんならうちに少しつきあって、遼一の話をきかせて。あなたが遼一のバッグを届けにきたということはきいていたけど、そのほかの話は何も知らんのよ。家には土曜日に帰るだけだからね」

「学校か何処か行ってるんですか」

彼女はほっほっというふうに、声を立てて笑った。

「うちが学生に見える。そうは見えんでしょう」

「学生でなければ先生か」彼はいった。

「サナトリウムの栄養士っていえば何だけど、実質はまあ精神病院の賄婦っていうところね。名前は中沢明子。……ついでに年を教えましょうか。昭和十九年生まれのオールドミス。……博子姉さんとは正反対のがらっぱちだってそう思うでしょう。誰でもそういうんよ。似とるのは顔だけ」

彼は何時の間にか中沢明子の声に連れられてそれまで歩いてきた線路道を引返し、幾本かの枕木を並べて杭にした手前の窪地を飛び越した。

「そこに機関車の給水所があったんよ」

「こんなところを機関車が走っていたなんて考えられないな」
「西部劇にでてくる機関車見たことがあるでしょう。あれより煙突は短かかったけれど、あんなふうな汽車が走っていたんよ。誰がどれだけ乗っても二十円」
レールを撤去した線路際に咲き乱れた黄色い草花を数本抜き取ると、彼はそのうちの一本を口にくわえ、残りを彼女の束ねた髪に向かって投げた。むろん頭をかすめるはずもなかったが、中沢明子はくるりと振返ると、「こらあ」と大袈裟な声をあげた。
線路沿いの道はやがて、錆びついた有刺鉄線のからんだ柵を間にして分岐し、彼は砂利を固めたコールタールをまたいで下りた。すると、彼の足どりよりも遅く器用にペダルを漕ぐ彼女の腰が突然均衡を失ったのだ。
「遼一のバッグにはこれといって別に入ってなかったとでしょう」
彼女は倒れかかった自転車を片足で支え、ワンピースの裾を払うような手つきをしながら、サドルを離れると、体面でも傷つけられたようにとげとげしい口調でいった。
「そんなバッグ、わざわざ持ってくることなんかなかったんよ。小包みで送ればすむことじゃないんね」

「それはそうかもしれんが、金がなくなったんだ。九州の海も見たかったしね」
中沢明子は笑いだすと、ふたたびサドルをまたいだ。
「あなたは正直を売物にする悪党ね、きっと」
「ありがとう」彼はいった。「この頃、人から批判されたことなかったからな、おれ」
彼女はくっくっと笑いつづけた。
「うちの療養所に、あなたとそっくりの患者がいるんよ。神戸の話ばかりするけど、言葉つきまでそっくり。あなた船乗りだったんじゃない。船に乗ってたんでしょう、違う」
「それは光栄ですが、中身が少しばかり違いますね」彼はいった。「船乗りじゃなくて、おれは薩摩守忠度。よくよくの場合じゃないと、切符買ったことがねえんだ。この頃ワンマンがふえてやり辛いよ。ありゃ運転手泣かせの強制労働だぜ、まったく」
「さっき九州の海を見たかったっていうてたけど、九州は初めて……」
「初めてもいいとこ。こんないかすところだとは思ってもいなかったな。まるで隠密扱いだもんね。毎日、銛と鉄砲に囲まれてさ、スリル満点だよ。おまけに一昨年起った殺人事件まできかされちゃ、まったくぞくぞくしてくるぜ。もしかすると、この村の人間は、島

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.